

夕顔と「山の端の」の歌

——「上の空にて」の位置付け——

藤河家 利 昭

はじめに

八月十五夜の明け方、五条の宿から近くの某院に着いて預りを呼び出す間の、源氏と夕顔のやりとりは次のようである。

「まだかやうなる事をならはざりつるを、心尽くしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしののめの道

ならひたまへりや」と、のたまふ。女恥ぢらひて、

「山の端の心も知らでゆく月は上の空にて影や絶え

なむ

心細く」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、か

のさし集ひたる住まひのならひならんと、をかしく思す。(夕顔一・二二三—四頁)⁽¹⁾

源氏の歌が、自身を昔の人と対比して、まだ経験がない、東雲の同車行に心を惑わしていることを強調するのに対し、夕顔の歌は、自身を月によそえて、男の心も分からずに付いて行く我が身は上の空で姿を消してしまふのではないかという不安を訴える。この贈答歌には「両者のくい違い⁽²⁾」が示されている。また女の恐怖を源氏は理解していない⁽³⁾。さて、夕顔の歌の「影や絶えなむ」は「死を暗示する」と言われる⁽⁴⁾。この歌が夕顔の人生において重い意味を持つと思われるが、夕顔がそういう不安を覚えるのは、自身は今「上の空にて」という状態にあると見ることに由来している。これはめつたに見られない夕顔の自己認識が示

うとする意図を見てよいのであろう。また尼君の歌は浮舟の詠んだ歌ということであるが、なお尼君の立場で浮舟を見ている面があると思われるので、夕顔のように自身を月によそえるのは普通でないようである。ところで、先の源氏を月によそえた例の中、末摘花、花散里、紫上など女君の方から源氏を月によそえていることからして、この場合も月によそえられるのは源氏の方がふさわしいかも知れない。そうすると、夕顔は自身をあえて月によそえることで源氏と、少なくとも男女の關係としては対等の位置に立つようとしているとも考えられる。これと対照的なのが、最初に夕顔が源氏に詠みかけた歌、「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」(二・二二四頁)である。この「夕顔の花」が源氏を指すとすると、身分の低い家に咲く花であるときれている点が理に合わないとする説がある。これは、本来自身をよそえるのにふさわしい夕顔の花をあえて源氏によそえることで、源氏を自身と対等の位置に立たせようとしたものと見ることが出来る。ここでは立場が逆になっている。それだけ夕顔の切実な思いが込められているように思われるのである。

以上は相手、又は第三者を月によそえるものであるが、これに対して自身を月と対比したり、同様のものと見る例

が源氏と宇治の中君にそれぞれ一つある。これも夕顔のように自身を直接月によそえるのではない。そして、源氏・中君の場合は独詠歌であるが、これは贈答歌である。しかも贈歌に月は詠み込まれていない。源氏は、須磨に退居した年の冬、「入り方の月影すごく見ゆる」情景で次の歌を詠む。

いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこと

もはづかし(須磨二・二〇〇頁)

月がまっすぐ「西に行く」のに対して、我が身は道真のようになどをさまざまとも分らない。源氏が古里の都を離れて須磨の地にあることが、月の運行に身の行末を対比させるのであろう。「雲路」は月の縁語であり、「上の空」に通うところがある。須磨よりもっと遠い所にさまようかも知れないとする源氏の歌と、住む所を離れ、身の落ち着きを得ぬまま姿を消すかも知れないとする夕顔の歌とは近いものがある。また中君が宇治を離れて都の匂宮の許に旅立つ途中で詠んだ歌がある。二月七日の月である。

ながむれば山より出でて行く月も世にすみわびて山に

こそ人れ(早蕨五・三五四頁)

歌に続けて、「さま変りて、つひにいかならむ、とのみ、あやふく行く末うしろめたきに」(同)とある。自身を月

と同様に見て、住み馴れた宇治を出て、これから行く都で住み辛い思い、再び宇治に帰って来るのではないかとするのである。「世にすみわびて」は、夕顔の「上の空にて」という身の落ち着きを得ぬ心持ちと通じるものがある。このように源氏・中君共に古里を離れて異郷か旅の途中かにあり、身の行末に不安を覚えている。夕顔も、仮の宿ではあるが五条の宿を出、知らない所に連れて来られて、身の行末に不安を覚えている。そして、いずれも空を行く月がそのような孤独な思いを引き出しているのである。このように見ると、夕顔の歌は贈答歌ではあるが、かえってその孤独な心を浮かび上がらせていると考えられる。源氏の歌の「しのめの道」と夕顔の歌の「ゆく月」とは、まさに天と地との隔たりがある。しかもこの月は五条の宿を出る直前に、

いさよふ月にゆくりなくあがれんことを、女は思ひ
やすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲がくれて、
明けゆく空いとをかし。(一・二・三三頁)

とあったもので、某院に着いた今、月は既に雲に隠れている。従って、源氏の歌の「しのめの道」とは時間的に逆である。夕顔が月の行方、即ち我が身の行末にこだわっていたことが分かるのである。そして、この歌は、上空で雲

に隠れる月にそのまま我が身の行末を見ている点が特異である。それは夕顔の生の有り様の特質を示していると考えられるのである。

二、「山の端の」の歌の位置

先の夕顔の歌は、夕顔の物語の中でどういう位置を占めるのだろうか。そのことについて考えるために、ここでは「影や絶えなむ」という表現に目を向けてみたい。『源氏物語』の中で他に「影」が「絶え」という言い方はない。この表現の前提として、「にはかに雲がくれて」とあったので、まず雲に隠れる月がどのように詠まれているかを見る。

① 行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空ながめそ(須磨二・一六七頁)

② なき影やいが見るらむよそへつつながむる月も雲がくれぬる(同二・一七四頁)

③ うき雲にしばしまがひし月影のすみはつるよぞのどけかるべき(松風二・四一〇頁)

①と③は、源氏が冤罪によって都を離れ、須磨に退居すること、②は、故桐壺院の面影が消えることを指す。②は、意味の上では夕顔の歌に近い。「月影」は、①の「雲」る、

⑧の「まが」うと表現されている。「影」が「絶え」ると
いう言い方は強い言い方の方である。これに近い意味で、
月の「影」は他に次のように表現されている。

④雲の上のすみかを捨てて夜半の月いづれの谷に影隠し
けむ(松風二・四一〇〜一頁)

⑤見し人の影すみはてぬ池水にひとり宿守る秋の夜の月
(夕霧四・四三八頁)

④は、桐壺院の崩御を指す。⑤は、月の光が澄みきって
る意に、故人となった柏木や一条御息所の水に映った影が
今は見えない意をかける。この「影隠し」は擬人的であり、
「影すみはて」も人を主にした言い方である。月以外の「影」
や「人影」の例も挙げてみる。

⑥年暮れて岩井の水も氷とち見し人影のあせもゆくかな
(賢木二・九二頁)

⑦身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は
離れじ(須磨一・一六五頁)

⑧見し人は影もとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとどせき
あへず(手習六・三四六頁)

⑨ほとりの大路など人影離れはつまじう(匂宮五・一四頁)

⑩かかるさまの人影などさへ絶えはてんほど、(椎本五・
一九三頁)

「影」・「人影」には、「あせ」、「離れ」、「とまらぬ」、「離
れはつ」、「絶えはて」などが続く。⑩の「絶えはて」がこ
の中では近い。「影」が「絶え」という言い方も、月に
ついては『源氏物語』以外でも見出だしたがいたので、人を
主にした言い方と言えるであろう。

この「影や絶えなむ」という表現で思い起こされるのは、
頭中将がした常夏の女の話で、女が姿を消したことを、
「跡もなくこそかき消ちて失せにしか」(帚木一・一五九頁)
と言っていたことである。「かき消ちて失せ」という
言い方も『源氏物語』には他にない。姿を晦ますにせよ、
死んでしまいうにせよ、男の前から急に姿を消してしまうと
ころに夕顔の生の特徴が示されているようである。頭中将
の前から姿を消したのは右大臣方の脅迫による。しかし、
女の歌、「うち払ふ袖も露けきとこなつに風吹きそふ秋も
来にけり」(同)から分かるように、その根本的な原因は
頭中将自身が長い間絶え間を置いたからである。夕顔も源
氏が自分を受けとめてくれるのかどうか分からない。こう
いう類推で読むと、夕顔が「影や絶えなむ」と言ったのは、
六条辺りの高貴な女性の存在を恐れていたことになる。そ
の邸は夕顔の五条の宿に近く、源氏は夕顔の宿の前を通っ
てそこに通っている。夕顔側が源氏の邸は突きとめられな

かつたにせよ、相手の女性に見当をつけていたことは考えられる。空蟬の物語にも、常木巻に「しののめ」の下で源氏と空蟬が後朝の歌を詠み合う場面があり、この二つの場面は対照的に描かれていると思われるが、空蟬は源氏の結構な扱いを受け入れる余裕もなく、伊予の夫のことばかり思われて、夫の夢の中に自分が現われるのではないかと恐れている。このように見ると、夕顔が漠然とした恐れを抱いていたとは考えがたく、現実の人間関係の中に我が身を置いて、六条辺りの高貴な女性の存在を意識していたと思われる。これは、源氏が、夕顔を取り殺したのは荒廢した邸に棲んでいた靈物のせいだと考えたのとずれがあることになる。「山の端(8)」の歌は、宿命とも言える夕顔の身の有り様を物語っていると考えられるのである。

三、「上の空にて」

夕顔が身の行末に不安を覚えるのは、我が身を「上の空にて」と見ることに由来するが、これは具体的にはどういうことであろうか。源氏は当初から名のりをせず、粗末な身なりをして、供の者も限り、隣に中宿りもしないといった風で、女に素姓を気取られないように通っている。それを女の方では、

女も、いとあやしく心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、暁の道をうかがはせ、御ありか見せむと尋ねれど、そこはかとなくまどはしつづつ、(二二二六頁)

と、源氏のやり方が変わっていて分からないことばかりである。また源氏はわざとのように粗末な狩の装束を着け、変装し、顔も少しも見せないで人が寝静まって出入りなどするので、「昔ありけん物の変化」のようで、女の方は嗅かずにいられない。相手の感じは掴んでも、手引きをした惟光は思いも寄らないといった風で浮かれ歩いている。これにも女は、

いかなることにかと心得がたく、女がたまあやしう様違ひたるもの思ひをなむしける。(二二七頁)

と、それがどういふことなのか納得が出来ない。ここでは源氏がどうしてそういうことをするのかという疑問を抱くに至っている。この「心得ぬ心地」、「心得がたく」という心持ちは、「上の空にて」という、源氏からどういふ扱いを受けようとしているのか分からなくて落ち着かない心持ちに連なっていると思われる。また源氏が五条の宿を出ようと誘うと、女は次のように答えている。

なほあやしう。かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ(二二八頁)

八月十五夜の場面でも二箇所、源氏は某院に夕顔を誘うが最後まで応諾してはいない。この「世づかぬ御もてなし」も、先のような源氏のやり方を指して、それをここでは普通とは違った自分への扱いだと言うのである。「上の空にて」は、源氏のやり方が納得出来ず落ち着かない心持ちと共に、普通とは違った扱いを受けている自分の立場も落ち着かないと言うのであろう。先には源氏の振舞いが「昔ありけん物の変化」のようだと女は思い、ここでもこの夕顔の言葉に続いて、源氏は「げに、いづれか孤なるらむな。ただはかられたまへかし」と言っている。源氏の振舞いや扱いには物の変化や孤の所行に通うところがあり、夕顔が「上の空にて影や絶えなむ」と言ったのは一斑の理由があることになる。

さらに夕顔の死後、右近は源氏に次のように語っている。はじめよりあやしうおぼえぬさまなりし御事なれば、
「現とおおほえずなんある」とのたまひて、御名隠しもさばかりにこそはと、聞こえたまひながら、なほざりにこそ紛らはしたまふらめとなん、憂きことに思し
たりし(一・二五八頁)

この「現とおおほえず」も、「上の空にて」という心持ちに通じるものがある。これは、空蟬の物語で、源氏が空蟬

の部屋に忍び込んで逢った時に、空蟬が「現とおおほえずこそ。数ならぬ身ながらも、思し下しける御心ばへのほどもいかか浅くは思うたまへざらむ」(帚木一・一七七頁)と言ったことを思い起こさせる。源氏が無理に空蟬に逢ったのは、物の数でもない身分の女と見下したからだと言うのである。また空蟬はこの一夜きりのはかない逢瀬を、「いかう仮なるうき寝のほど」(一七八頁)と言っている。夕顔の、現実とも思えないという心持ちには、そういう扱いを受けることを不当とする響きがある。それは、源氏が自分を低い身分の女と見下しているということにもなるであらう。源氏の普通と違った思いがけない様子の中でも「名隠し」は、「なほざり」、即ちその場限りのものと考えて紛らわしているのであるうとに帰せられる。

「上の空にて」は、源氏のやり方を現実とは思えないとする心持ちと通じ、その根底には自分が低い身分の女と見下され、「なほざり」に扱われているという意識があると考えられる。

今井源衛氏は、「源氏は、夕顔の生から死へのどの地点に於いても、彼女にとってには心底から「うちとけ」る事のできない他者でしかなかった」と言われている。源氏が夕顔を、「ひたぶるに従ふ心はいとあはれけなる人」(一・

二二九頁)、「うちとくる心ばへなど、あやしく様変りて」(二三三頁)と見ているのとは裏腹に、夕顔は源氏との関係に抛り所を見出だし得ず、大きな隔たりを感じていたことになる。五条の宿を出る前に、源氏が来世もと契るのに答えた歌、「前の世の契り知らるる身の憂さに行末かねて頼みがたきよ」(二三三頁)も、自分が行末を頼むことが出来るような立場にないことを訴えている。この「身の憂さ」は、先の「憂きこと」からして、源氏が素姓を隠し、その場限りに紛らわしていることを指すのであろう。これを受けて「上の空にて」は、源氏との関係を持ちながらその心の隔たりの大きさを上空の月に寄せて表わしたものである。同時に、夕顔は心細い境遇にあり、頭中将であれ源氏であれ、誰かを頼りにせざるを得なかったため、この「上の空にて」には、源氏との関係において自身の占める位置を見出だし得ない嘆きが込められているのである。

四、夕顔巻の周辺

夕顔の歌の「上の空にて」がどのような特色を持つかを、『源氏物語』の他の用例や他作品との比較によって考えてみる。「上の空にて」は、『源氏物語』では他に四例あって、源氏の歌、「おしなべてたたく水鶏におどろかば上の空な

る月もこそ入れ」(落標二・二八八頁)や、薫の心中を表わす部分、「上の空にてもものしたらんこそ」(夢浮橋六・三六八頁)のように、浮気などか事情がはっきりしないとかの意味の外、明石君と女三宮に用いられている。明石君の場合は、上京して大堰に住むようになった時の心中を表わす部分である。

冬になりゆくまに、川づらの住まひいと心細さま
きりて、上の空なる心地のみしつつか明かし暮らすを、
君も、「なほかくてはえ過ぐさじ。かの近き所に思ひ
立ちね」とすすめたまへど、「つらき所多く試みはて
むも残りなき心地すべきを、いかに言ひてか」などい
ふやうに思ひ乱れたり。(薄雲一・四一七頁)

明石君は古里の明石を出て来たが、この大堰の邸は、源氏がたまに来るのを待つ心細い所である。場所もどつつかずであり、源氏の愛情も期待出来るかどうか分からない。「上の空なる」は、こういう明石君の落ち着かない心持ちを表わしている。女三宮の場合は、六条院へ降嫁して五日目の朝、源氏との贈答歌の中で用いられている。

中道を隔つるほどはなけれども心乱るる今朝のあは雪
はかなくて上の空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあ
は雪(若菜上四・六四～五頁)

源氏が今朝はお伺い出来ないと言ったので、源氏の愛情が頼りになるかどうか分からず落ち着かない心持ちを表わしている。また宮が興入れして来たばかりで、六条院が落ち着き場所とはなっていないという事情も考えられる。この贈答歌は、「中道」と「上の空」を対比させるなど、先の源氏と夕顔の贈答歌によく似ている。殊に宮の歌の「上の空にぞ消えぬべき」は、夕顔の歌の「上の空にて影や絶えなむ」と殆ど同一のモチーフの繰返しである。この両者の背景には、宮は父朱雀院が出家し、夕顔も親がなくて心細い境遇にあるので、共に源氏一人を頼みにしなければならぬという事情がある。このように「上の空」は、源氏の愛情が頼りに出来るかどうか分からず落ち着かない心持ちである。それには見知らぬ場所へ来て落ち着かないということもあると見られる。これは夕顔の場合も同様である。

『源氏物語』以外の物語や日記を見ると、『竹取物語』・『伊勢物語』・『大和物語』・『平中物語』・『宇津保物語』・『蜻蛉日記』・『和泉式部日記』・『紫式部日記』などには見られない。『落窪物語』には一例のみ、「かく上の空に御局あるまじかめるものを」(一四五頁)⁽¹⁰⁾とある。これは不用意に(やって来て)という意味である。平安後期の物語でも『狭衣物語』・『夜の寝覚』にはない。『浜松中納言物語』には

二例、「さりとてかく行方も知らぬ上の空にうち捨てたてまつりて」(巻の五、四一〇頁)⁽¹¹⁾、「見し人ひとりも身に添はず、行方も知らぬ上の空にただよひて」(同四二三頁)とある。これは吉野姫が式部卿宮に連れ出されて古里を離れていることを指す。その点で夕顔の場合に通じるところがあるが、男の愛情を言うのではない。

『紫式部集』では次のように用いられている。

何の折にか、人の返事に

入る方はさやかにりける月影を上にも待ちし宵かな

返し

さして行く山の端もみなかき曇り心も空に消えし月影
(同集九二・三。『新古今集』卷十四恋四、一二六一・三にもある。返歌四句「心の空に」)。

式部の歌は、「上の空にも」を「月影」との縁で用い、相手を月によそえて、相手が外へ行くつもりであったのに自分はそのう事情も分からないで待っていたというのである。返歌は、自身を月影によそえて、目指して行くあなたの所も機嫌が悪いので近づこうにも近づけず意に反して姿を消したのだというのである。この「心も空に消えし月影」は夕顔の歌と同一の発想である。「上の空にも」は、

相手との関係において、自分が相手のことを全く知らない立場にあることを表わしている。それは夕顔の場合も同じである。

次に、数は少ないが、『源氏物語』前後の私家集の用例を見ておく。

- ① 立つ雉の上の空なる心にものがれがたきはこの世なり
けり『高光集六』、『実方集』七一。三句「心地にも」、五句「世にこそありけれ」。『万代集』卷十四雑歌一・二一九〇、
実方朝臣)
- ② 彦星の心も知らずうちとけてその逢ふことを上の空に
な『実方集』三〇六)
- ③ 日かげさし少女の姿見てしより上の空なるものをこそ
思へ『大式高遠集』六三。『新勅撰集』卷十一恋一・六四七。
- ④ 飽かずといふ玉こそ袖に通ふなれ上の空なる月も入り
けり『大斎院前の御集』二二〇。
- ⑤ いつしかと譬ふる雪も消えぬるに上の空にも思ほゆる
かな『和泉式部集』七七二)
- ⑥ 伊勢島に与謝の湖より飛び通ふ上の空にもかひになし
けり(同五二五。『夫木抄』卷二十七雑部二六七七、祭主輔親)
- ⑦ 萩の上に露吹きそへし雁が音を上の空にも聞きてける
かな(同八二五)

⑧ 笹蟹や上の空にもかきやらで思ふ心の中を見せばや
(『和泉式部統集』五八七)

①は、心がこの世から離れていること、②は、逢う事を頼みにならないものにする事、③は、女を思って心が落ち着かないこと、④は、上空にあって手が届かないと思われたい月ということ、⑤は、男の心が当てにならないこと、⑥は、上空で手が届かなくてもということ、⑦は、男が自分の言うことを立ち聞きし、無関係に聞いたこと、⑧は、文を相手に渡るかどうかも分からないままに書くことである。この中で夕顔の歌に近いのは⑤で、この雪は詞書によれば男が「思ふ事の積もりぬる事」をよそえたものであるが、その雪が消えては頼むものがなくて心が落ち着かないのである。これは男との関係において自身の位置を見出だせない点である。その点では先の『紫式部集』の式部の歌とも似ている。いずれも女の歌である。夕顔の歌もこういう女の歌と発想を同じくしていると言えよう。しかし、それが見知らぬ所にあることを前提にしていたり、「影や絶えなむ」という結末を招くことは、やはり物語歌の特色であろう。

五、源泉の受容

夕顔の歌の「上の空にて」がどうという問題を持つかを、

源泉の受容の面から考えてみる。先に触れた『宇津保物語』俊蔭巻では、「八月中の十日ばかりに」、若小君が俊蔭の屋敷に立ち寄って、女を月によそえて、「入りぬれば影ものこらぬ山の端に宿まどはしてなげく旅びと」と詠みかけたのに対して、俊蔭女は、

陽炎のあるかなきかにはほのめきてあるはあるとも思はざらなむ(一・一〇二頁)⁽¹³⁾

と答えている。この両歌が夕顔の歌の源泉の一つと考えられる。俊蔭女が前の歌の「影ものこらぬ」を受けて、自身を「陽炎」のようにあるとも言えない存在であるとしたのは、親もなく落ちぶれた身の上にあるからである。俊蔭女は、若小君に対して、「立寄り給へば、入りぬ」、名のりをするように求められても、「いらへもせず立ちぬ」、最後に塗籠で話しかけられても、「をさをさいらへもせず」(一〇二頁)という態度を取っている。名のりをして男と関わりを持つことに身分の隔たりを感じて抵抗を示している。俊蔭巻が扱ったと見られる『竹取物語』のかぐや姫も、人内させようとする帝の命や意向を受けた中臣のふさ子や翁に對して頑なに応じないし、最後に帝自身が訪れて強引に連れて帰ろうとすると、「このかぐや姫、きと影になりぬ」(九三頁)⁽¹⁴⁾ということになる。これは姫自身が言っているよ

うに「この国」の人ではないからである。夕顔も再三にわたって源氏から五条の宿を出て気楽な所や近くの某院に行くことを求められるが、夕顔は素直には応じていないし、最後には洪っている。夕顔の歌の源泉と見られる俊蔭女の、「陽炎」のようにあるとも言えない存在とする自己規定と、かぐや姫の影への変身には、身分の差や住む世界の違いということが要因としてあるのである。

一方、夕顔の物語において、男が素姓を隠して女の許に通って来るといふモチーフは三輪山説話をふまえたものと言われている⁽¹⁵⁾。また、それは三輪山型神婚譚の発想をふまえるが、三輪山型と限定すべきではないとも言われる⁽¹⁶⁾。別に葛城一言主説話をふまえるとする説もある。ここでは夕顔の歌に注目する立場から『河海抄』巻二に挙げる箸墓伝説をあらためて検討してみる。『日本書紀』巻五、崇神天皇十年の条による。倭迹迹日百襲姫は大物主神の妻となつたが、神はいつも昼には姿を見せないで夜だけやって来る。そこで姫は夫に、お顔を見ることが出来ないのので暫く留まっていただいて、「明日に、仰ぎて美麗しき威儀を覩たてまつらむと欲ふ」(二四六頁)⁽¹⁸⁾と云う。これは夕顔が源氏に「心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花」(二・二二四頁)と詠みかけたことから二人の関係が始まっ

たことを思わせる。最後に姫が、大空を踏んで御諸山に登られた神を「仰ぎ見て、悔いて急居」(二四七頁)となり、それが命取りになる。この大空(『日本書紀』では「大虚」)と「上の空」とは関係があるかも知れない。それはともかく、姫が悔いたのは、神から「願はくは吾が形にな驚きましそ」と言われたのに、小蛇こせうらとなった神の姿を見て「驚きびずして吾に羞せつ」ということになる。即ち、姫は我れ知らず戒めを忘れて、結果としてそれを破ってしまったのである。それは神と人との境界を踏み越えて神の領域を犯したことになるのであろう。夕顔も「上の空にて」、心も落ち着かぬままに霊物の棲む某院に入り込んで命を失うこととなる。夕顔は足を踏み入れてはいけない所へ入り込んだのであるが、それは同時に身分の隔たりを越えて源氏と関わりを持つことも重なっている。夕顔の物語は、三輪山神話から神との通婚というモチーフを受けて、身分の違う男女の結婚に移し替えているが、それと共に神と人との決定的な違いが男女の越えがたい身分の隔たりとして捉え直されている。

六、夕顔登場の意義

さて、「上の空にて」に示される夕顔の源氏との関わり方は、女の身の有り様として見る時にどのように位置付けられるであろうか。先ず夕顔の詠んだ四首を全て挙げてみる。

①心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花
(二・二二四頁)

②前の世の契り知らるる身の憂さに行末かねて頼みがた
さよ(二三三頁)

③山の端の心も知らで行く月は上の空にて影や絶えなむ
(二三四頁)

④光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時の空目なりけり
(二三六頁)

①は、「心あてに」、即ち当て推量でと言っていて、はっきり源氏と確めた訳ではない。②の「身の憂さ」は、先に触れたように「御名隠し」など源氏が普通と変わった思いがけない様子で通ったことであろう。③は、それを受けて源氏が自分をどう扱おうとしているのか分からなくて「上の空にて」と言っている。④で「空目」と言ったのは、わざと逆に言ったというよりも、①の歌を詠みかけたことに

後悔や羞恥を感じているのである。①の「心あてに」、②の「上の空にて」、③の「空目」は、いずれも相手の素姓や心を正しく捉えていないことを表わす。こうして見ると、夕顔の歌は、源氏の素姓を知り得ないことに関わるものばかりである。

雨夜の品定めで、左馬頭が女性論のまとめとして語った部分は次のようである。

よろづの事に、などかは、さては、とおぼゆるをりから、時々思ひ分かぬばかりの心にては、よしばみ情だたざらむなむめやすかるべき。すべて、心に知れらむことをも知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなんあべかりける。

(帚木一・一六六頁)

前半部分の、必要がなくそのままでもよいと思われる場合、時節を弁えぬ程度の分別心では、気取ったり風流ぶったりしないのが無難だという考えからすると、夕顔は当て推量で源氏に歌を詠みかけたり、源氏の心が分からず心が落ち着かぬままに関わりを持つなど、むしろそれに背いている。後半部分の、知っていることでも知らない顔をし、言いたいことがあっても一、二の点はそのままにしておくのがよいとする考えには、夕顔は普通の人と違って「ものづつみ」

をすることからしてもかかっていると見えよう。夕顔の源氏への関わり方もこういう観点で捉えることが求められているのである。しかし、左馬頭の論は、物語の方向付けをしているだけで、それに合うか合わないかが問題になっているのではないと考えられる。

夕顔の物語と対照されながら描かれている空蟬の物語の場合を考えてみる。⁽¹⁶⁾空蟬は、源氏が二度目に訪れた時も、源氏にひかれる心があって思い乱れるが、「とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむと、思ひはてたり」(帚木一・一八七頁)ということに立って、次の歌を詠んで源氏に贈る。

数ならぬ伏屋に生ふる名の憂きにあるにもあらず消ゆる帚木(二・一八七〜八頁)

この「あるにもあらず」は、自身を、情を解さぬ気に食わない女であろうとすることに立って、あえてあつてなきがごときものとするのである。⁽²⁰⁾これには現在の受領の妻という身分意識が強く働いている。空蟬はそのように自己規定をして源氏との関係を断ったのである。夕顔の場合は、源氏との関係を持ちながら、「上の空にて」と源氏との大きな隔たりを感じている。ここにもその要因として身分の違いがある。このように「あるにもあらず」と「上の空に

て」は、共に自己を規定したり認識したりする言葉であるが、それは両者の生の有り様の相違を端的に示していると言える。そしてそれは良否を越えてそうではか有り得ないものと見るべきであろう。作者は、『源氏物語』の実質的な始まりにおいて、対照的な二つの女の生の有り様を提示したのである。

夕顔の「上の空にて」のように、男との関係の中にあつて、主として身分的な要因によって心の隔たりを見出だすという自己認識の仕方は、紫上と浮舟に受け継がれている。女三宮降嫁後の紫上に次のような例がある。

昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦し
く（若菜上四・七八頁）

あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな。（同四・
二〇三頁）

前者は、源氏が、女三宮降嫁に加えて昔の朧月夜との仲を復活させたので、どっち着かずの不安定な身の上であると云ったのである。後者は、今までの源氏との関係を振り返って、拠り所がなく落ち着かない身の上であると言っている。この直後に紫上は発病している。次に、匂宮との関係が生じた後の浮舟に次のような例がある。

橘の小島の色は変はらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

（浮舟六・一四二頁）

降り乱れみぎはに氷る雪よりも中空にてぞわれは消ぬ
べき（同六・一四六頁）

前者は、対岸の人の家に渡る途中である。匂宮の行末を契る心があてになるものかどうか分からず、浮舟のようにどこへ行くとも知れないのである。後者は、その家で匂宮に答えた歌である。やはり匂宮の愛情があてにならず、どっち着かずで消えてしまふであろうと言っている。夕顔の歌との類似性が指摘される歌である。⁽²⁾この後浮舟は、薫と匂宮の間に立って進退に窮することになる。夕顔と紫上は頼りない身の上であり、浮舟も匂宮との関係が生じては母を頼りにする訳にいかないであろう。これらの自己認識には、相手の源氏や匂宮一人を頼みにしなければならぬ事情が作用しているのである。

注

(1) 『源氏物語』本文の引用は『日本古典文学全集』により、巻数と頁数を示す。以下同じ。但し、表記を改めたところがある。

(2) 日向一雄氏「夕顔巻の方法―視点―を軸として」（『国語と国文学 昭和61年9月』）

(3) 『日本古典文学全集 源氏物語一』一三四頁頭注。今井源

衛氏「夕顔の性格」(『平安時代の歴史と文学 文学編』所収。昭和56年11月刊。一二頁に指摘がある)。

(4) 玉上琢弥氏著『源氏物語評釈 第一巻』四〇三頁。

(5) 黒須重彦氏「白き扇のいたうこがしたる」(平安文学研究第四十六輯 昭和46年6月)、松尾聰氏「夕顔巻『それかとぞ見る』の歌をめぐって」(文学 昭和57年11月)。

(6) 男女の心の隔たりをこのような形で表現したものととして、一首の中においてではあるが、朝顔巻の紫上の歌、「氷とち石間の水は行きなやみ空すむ月の影ぞ流るる」(二・四八四頁)がある。「石間の水」を自身に、「空すむ月の影」を源氏によそえる。

(7) 源氏は夕顔との同車行をまだ経験したことがないとし、昔の人と対比している。それに対して空蟬の態度を、「世に知らぬ御心のつらさもあはれも、浅からぬ世の思ひ出は、さまざまめづらかなるべき例かな」(一・一七九頁)と言っている。また月の様子も、「月は有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えて、なかなかをかきあけぼのなり」(一八〇頁)と対照的である。

(8) 今井源衛氏の言われる源氏と夕顔との「心理的断層」(注3の論文。同書の二二頁)はこういうところにも当てはまるようである。

(9) 注3の論文。

(10) 『日本古典文学大系』により、頁数を示す。但し、表記は改めたところがある。

(11) 『日本古典文学大系』により、頁数を示す。但し、表記は改めたところがある。以下同じ。

(12) 『新編国歌大観 第三巻』により、その歌番号を示す。但し、表記は改めたところがある。以下『新古今集』・『新勅撰集』が同書第一巻、『万代集』・『夫木抄』が第二巻、その他は第三巻により、同様に表記を改めたところがある。

(13) 『日本古典全書』により、巻数と頁数を示す。

(14) 『日本古典文学全集』により、頁数を示す。

(15) 三谷栄一氏「夕顔物語と古伝承」(『講座源氏物語の世界』第一集所収。昭和55年9月刊)、藤井貞和氏「三輪山神話式語りの方法そのほか―夕顔巻―」(共立女子短期大学(文科)紀要第二十二号 昭和54年2月)など。

(16) 高橋享氏「夕顔の巻の表現―テクスト・語り・構造―」(文学 昭和57年11月)。

(17) 後藤祥子氏「三輪・葛城神話と『夕顔』『末摘花』」(『源氏物語の史的空間』所収。昭和61年2月刊)。

(18) 『日本古典文学大系 日本書紀上』の頁数を示す。以下同じ。

(19) 増田繁夫氏は、「空蟬と夕顔―処世のかしこさをつたなさい」(『源氏物語の探究』第五輯所収。昭和55年5月刊)において、「夕顔が空蟬に対立するあり方の女として描かれてゐると考えるには問題がないであらう」(一七頁)とされている。

(20) 拙稿「帯木の歌と空蟬―あるにもあらず」の位置付

け―』、『源氏物語の内と外』所収。昭和62年11月刊。

(21) 今井源衛氏「浮舟の造型―夕顔・かぐや姫の面影をめぐって―」(文学 昭和57年7月)。

(本学助教授)